

## &lt;前回・王権&gt;

## (1) 古代オリエントの王権

2. Theodore Hiebert, "The Human Vocation: Origins and Transformations in Christian Traditions", in: Dieter T. Hessel and Rosemary Radford Ruether (eds.), *Christianity and Ecology*, Harvard University Press, 2000, pp.135-154.

The priestly view of dominion is amplified when humans are created in God's image (Gen. 1:26-27). No expression in Genesis 1 has been debated more forcefully by biblical scholars and theologians alike than the "image of God," in the attempt to discover what qualities the image of God bestows on the human race. The clearest context for this expression in the biblical world is the royal ideology found in both Egypt and Mesopotamis, in which the king was regarded as the image or likeness of the deity. This resemblance between god and king was not primarily one of character or substance but one of function and position, so that it identified the king as the representative of the deity, with a divine mandate to rule. Understood in this light, the expression "the image of God" in Genesis 1 grants humans, not a unique essence, but a unique function within the created order: to exercise authority as God's representative in creation. Such a vocation reflects precisely the divine commission already described in which humans are assigned dominion in creation. And it directly parallels the priest's own role as the mediator of God's presence on the earth. (137-138)

3. 金子晴勇『キリスト教人間学入門——歴史・課題・将来』教文館、2016年。

## (2) 古代イスラエルの反王権思想と王制

## 諸部族→12部族連合イスラエル→王国

4. 統一王国の意義
5. 12部族連合・軍事指導者としての士師 (=反王権思想)  
ヤハウエのみが支配者、人間が人間を支配すべきではない。
6. 調停者としての王  
cf. 古代オリエントの王権イデオロギー：絶対権力者としての王  
地上における神の代理、神の子、あるいは神的な存在 → 近代の王権神授説
7. 王自身が一人の人間であり、罪人である。  
ダビデの罪（ウリヤの妻バト・シェバを奪い妻とした）と預言者ナタンによる糾弾。

## (3) 王権の意味

8. 「支配」の問題：  
・「権威と権力」（法と儀礼）  
・神と人間との媒介者・仲保者あるいは主権者  
王権はこの文脈に位置する。
9. カール・シュミットの主権論  
・『政治神学』未来社。  
「主権者とは、例外状況にかんして決定をくださる者をいう」(11)

## (4) 主権の論理構造——アガンベンの場合——

10. シュミットの主権論あるいは「原初的な政治的構造」（アガンベン、1995、107）。  
シュミットの主権論 → 逆説と例外という論理構造
11. 「主権の逆説は次のように言い表される。『主権者は、法的秩序の外と内に同時にあ

る』。主権者は事実、例外状況を布告し、それによって秩序の効力を宙吊りにするという権力を法的秩序によって認められている者である。だとすれば、主権者は『法的秩序の外にありながら、法的秩序に所属している。というのは、憲法が全面的に宙吊りにされうるかどうかの決定は彼に任されているからである』。『同時に』という正確を期した表現は、ありきたりのものではない。主権者は、法の効力を宙吊りにする合法的な権力をもつことによって、合法的に、法の外に身を置く」（同、25）、「シュミットによれば、主権による例外化において問題になっているのは法的規範のもつ効力の可能性の条件そのものであり、また、国家の権威の意味そのものでもあるからだ。主権者は例外状態を通して『状況を創造し保証』する。」（同、28）

12. 主権の論理構造：「法的秩序の外と内」の「同時」の逆説性。

しかし、法という意味システムを根拠付けるものは何か？

13. システムの根拠付けをシステム内部から行なう際に発生する逆説（無限遡及のパラドックス）。

「現代の思考はあらゆる領域で例外の構造に直面している。したがって、言語活動による主権の要求とは、意味を外示と一致させようとする企てである」（同、40）。

意味と外示 → 意味と指示、言語の内と外

芦名定道『ティリッヒと現代宗教論』北樹出版、1994年、86-99頁。

15. 暴力や欲望との連関。

「主権者とは、暴力と法権利のあいだが不分明になる点であり、暴力が法権利へ、法権利が暴力へと移行する境界線だ、ということである。」（同、50）

16. 「ホモ・サケル」（Homo Sacer）。古代ローマの文献（ポンペイウス・フェストゥス『言葉の意味について』）に登場する「聖なる人間（ホモ・サケル）」という謎めいた形象——「誰もが処罰されずに殺害することができたが、彼を儀礼によって認められる形で殺害してはならなかった」——から、政治と宗教の関係性の原初形態へ。

18. 「聖化は二重の例外化をなしている。それは人間の法からの例外化であるとともに神の法からの例外化であり、宗教的領域からの例外化であるとともに世俗的領域からの例外化でもある」（同、118）、「ホモ・サケルは、犠牲化不可能という形で神に属し、殺害可能性という形で共同体に包含される。犠牲化不可能であるにもかかわらず殺害可能である生、それが聖なる生である。」（同、119）

19. 主権とホモ・サケル（例外における同型性）。

## 6. ローマ帝国、イエス、パウロ

### <問題>

- ・聖書解釈における政治・国家という問題
- ・新約聖書の場合、ローマ帝国との関係性におけるキリスト教

#### （1）伝統的な初期キリスト教理解

1. 南原繁『国家と宗教——ヨーロッパ精神史の研究』（1942年）

「ローマ帝国は」「強大な一個の強制的権力機構以外のものではなかった。その普遍的統一の秩序にもかかわらず、社会の根本原理は個人であり、人間は原子的個として存し、その上にはヘーゲルがいみじくも言ったように、同じく「原子中の原子」（nomas monadum）として権力を振る巨大な一人の専制的圧迫の下に立っていたのである。いわゆる「ローマの平和」と称せられるものも、その実質において、苛酷な専制政治の統一状態以外のもの

ではなく、その内部にはもろもろの闘争の契機を包蔵するのであった。その盛んな商業の発達も、少数一部階級の奢侈と一般民衆の圧迫を語るものにほかならなかった。」(80)

「真に内的な自由を求めて喘いでいた」(81)

「神との離反、すなわち人間罪惡の克服あるいは救済は、いかなる道德主義または神秘主義とも区別して、ただ神の側からの絶対の恩恵——すなわち神の子イエスを通して顕示された神の無限の愛によってである。」(85)

「ギリシャ・ローマ文化の潮流に打ちひしがれ、抑圧されていた一般民衆にとっていかに大なる「革命」であったかは、われわれの容易に首肯し得るところである。」(86)

「人間本質の転回」「新しい人格概念」「自由な個性」「人格の甦生」(86)

「ただ神の栄光を中心とし、キリストの霊によって充たされる純粋に精神の国」「愛の共同体」「最後の審判を通して世界の更新と人類歴史の終局において完成される「天の国土」「神の秩序」、それがいわゆる政治的な国家または社会的な組織とは差しあたりかわりないことを、まず明らかにしなければならない」(88)

「未来の理想社会「神の国」」(89)

「かようなイスラエルの観念から一切の政治的国民的要素を超克して、これを純粋に宗教的内面の要求に高めたこと」、「イエスの使命はひとえに宗教の内面的「単純化」、「純粋に神の霊の紐帯によって結ばれる愛の共同体」(91)

「それは何らかの組織として構想されなかったと同時に、また理論として説かれたのではなかった」(92)

## 2. 宗教改革に遡り、19世紀の聖書学によって強化されたイエス像、キリスト教理解。 非政治的で内的なキリスト教、近代的宗教理解



この伝統的な議論については、まずイエス研究において批判的な研究がなされ（1960年代以降）、それはさらにパウロ研究に及んでいる（1990年代以降）。

## 3. 近代聖書学のもう一つの帰結：歴史的懐疑論

- ・伝承史：イエス→断片的な口承伝承（弟子たち）→収集・文書化→編集
  - ・現存のテキストから最古層へ遡及し再構成する。弟子集団＝共同体における伝承の法則性の確定→逆算（様式批判）、イエス自身には遡及しない。
  - ・編集者の意図の解明（編集批判）

・ブルトマン『イエス』（未来社）

「人間と歴史の関係は、自然との関係とは違ったものなのだ」、「客観的自然観察があるという意味での客観的歴史観察はありえない」(7)、「叙述はただ歴史との絶えざる対話でしかあり得ない。」(8)

「方法の主観性」(9)

「以下の叙述は、普通の意味での客観性を要求し得ないとしても、他の意味では大いに客観的なのである。それはつまり評価を与えることを断念している」、「以下の叙述には、イエスを偉人や天才や英雄にするような言い回しは全く欠けている。」(11)

「イエスの「人となり」に就いての興味も排除されている」(12)、「私個人としては、イエスは自分をメシアと考えなかったという意見である」、「それは結局のところ、この問題については確かな事は何も言えないからではなく、むしろこの問題は副次的な事柄だと

思うからである。」(13)

「その意志したところは、実際、一連のまとまった命題や思想として、教説としてしか再現され得ない」、「このものは事実ただイエスの教説としてのみ捉えられ得るのである。」

(14)

「思想というとき、それは時の中に生きている人間の具体的状況と切り離せないものとして理解されている。すなわちそれは、動きと不確実性と決断の中にある、自身の実存の解釈なのである。」(15)

「その「教説」、その宣教なのである」、「実際さしあたりは教団の宣教なのである」(16)、

「伝承の最古の層の中にある思想の複合体が私達の叙述の対象だからである。」(17)

## (2) イエス・ルネサンス——懷疑論を超えて

4. 過去についての知を断念できるか？ あるいは過去についての知ほどの程度修正可能か(歴史修正主義の問題)？

・ハンス・ヨーナス『アウシュヴィッツ以後の神』法政大学出版局。

「第二章 過去と真理——いわゆる神の証明にたいする遅ればせの補遺」

「存在しないこと、とくにもはや存在しないこと、過ぎ去ったことのなかにも真偽の区別は存在しているということ、私たちが要請するならば、また、過ぎ去ったことが帯びているこの逆説を含んだ正当性が私たちの時間性に不可避につきまとわざるをえないものであるならば、私たちが自分自身の時間性を有意味に生きぬくことができるためには、畢竟、かつてあったことはなんらかのしかたで現前しているということに訴えるほかないというテーゼ」(47-48)

「私たちは過去についての真偽の区別を断念することはできない。その区別がなければ、私たちはほかのひとと会話したり一緒に行ったりするような共通の世界もないことになるだろう」、「過去としての過去の現前」「実体的な現前ではない、心的(志向的)な現前」(50)

↓

「「過ぎ去ったことの永遠の現前」はどこにありうるのだろうか」(50)

「記憶は精神を有する主体のなかに場を占めなければならない」、「普遍的で完璧な精神」

「有限で歴史的な実存の可能性の超越論的制約」「認識しつつ時間的に現存している私たち自身の時間的現存が理解可能であるためには、過去の客観的現前が要請される。」(51)

「過ぎ去ったことの真偽を区別する可能性の制約」(54)

5. イエス・ルネサンス：

「今日イエス研究が蘇ったというのは驚くべきことである」、「それが進行中であること」(ボーグ、21頁)

1970年代に遡る、サンダース、ジョージアン、ホースレイ、マック、ボーグ

「一九八五年、第二の研究部会が生まれた。「イエス・セミナー」である」、「際だって新しい意図と方法が生じてきたことである」(22)

「文献に対する問いかけの枠組みが特にキリスト教的なものでなくなってきている」「多くの聖書学者が公立総合大学や世俗化した私立単科大学で教えている」(23)

「イエスの宣教と使信は「非終末論的」なものだったのだ」(27)

「イエスを教師として、特に世間を覆すような知恵の教師として新たに理解する」(29)

「イエス当時の社会的世界に対する関心が急激に高まっている」(31)

「イエスの言葉を中心にして方法論を展開するならば、徹底した史的懐疑主義に陥ることは避けられない。イエスの言葉を直接引用したものは、仮にあったとしても稀である」(34-35)  
「これとは別の出発点」「宗教的人物の類型論（宗教史学、人類学、宗教心理学から引き出される）に慣れ親しむことであり、これによって啓発的な地の利が得られるのである」  
宗教的個性：カリスマ的な「聖なる人」、「賢者」、「預言者」、「復興運動の創始者」  
「文化横断的類型論によって先ずモデルが決められ、次にそれが福音書本文自体の中に見いだされるものによって確認される」(35)

1) Marcus J. Borg (1942-),

*Jesus in Contemporary Scholarship*, Trinity Press International, 1994.

*Conflict, Holiness and Politics in the Teaching of Jesus*, Trinity Press, 1984.

2) John Dominic Crossan (1934-),

*The Historical Jesus. The Life of a Mediterranean Jewish Peasant*,

HarperSanFrancisco, 1991.

### 13. Magic and Meal, pp.303-353

My wager is that magic and meal or miracle and table constitutes such a conjunction  
and that it is the heart of Jesus' program. (304)

Jesus. A Revolutionary Biography, HarperSanFrancisco 1995

(ジョン・ドミニク・クロッサン『イエス あるユダヤ人貧農の革命的生涯』  
新教出版社)

↓

- ・知恵の教師イエス
- ・知恵から終末論を再解釈する
- ・歴史という基盤と限界

歴史は信仰の必要条件であるが、十分条件ではない。

6. 聖書学の基本的な方法論である歴史的批判的方法は、社会科学と結びつく。

歴史の主体としての共同体 → 個と共同体の関係をいかに理論化できるか。

歴史学的方法における「類比」の機能、解釈者の社会認識との類比

- ・ブルトマンにおける様式史・「生活の座」の変容。

社会学的な問いから、実存的問いへ → 社会科学的問題からの分離

- ・社会学的問いへの回帰

G・タイセン『原始キリスト教の社会学』ヨルダン社。

### (3) クロッサンの聖書学

7. 方法論、あらゆる方法を駆使すること

- ・ジョン・ドミニク・クロッサン『イエスとは誰か——史的イエスに関する疑問に答える』  
新教出版社、2013年。

「イエスの実像を描くには、いろいろな学問を使います」、「三機の大きなサーチライトで夜空の物体を照らすとします」、「そのサーチライトの一つが、通文化研究(*cross-cultural study*)です。イエスの生きた社会環境を知るために、これを使います。何をするかというと、当時と似た社会を一通り見渡すのです。」(16)

「二の目のサーチライトは、イエス時代のギリシャ・ローマ史・ユダヤ史研究(*historical*

study about Greco-Roman and Jewish)です。」

「三つ目のサーチライトは、本文研究(*textual study*)です。」「伝承の三段階を見分けること  
であります。」(17)

↓

「クロッサンの方法」

「第一は、何がイエスに遡りうるかを判定する部分」、「第二は、その資料が何を意味し  
ているかを解釈する部分」(ボーク、74)

○第一：「できるだけ客観的かつ計量的たるべき」「考古学的なモデル」

・第一段階：イエス伝承の「層分け」「階層化」

第一層：紀元 30 年から 60 年

Q資料、初期トマス文書、真正パウロ書簡、奇跡物語集

第二章：紀元 60 年から 80 年

第三層：紀元 80 年から 120 年

第四層：紀元 120 年から 150 年

・第二段階：「各層でイエスに遡るとされる資料の独立証言を計量する」「数え上げるこ  
と」、イエス伝承を「複合体」に分類する。

「神の国と幼な子」に関する言葉全体を一つの複合体とし、「この複合体が各々独立  
して何回立証できるか」を問う。各複合体に番号をふる、1/4 など。1/4 = 第  
一階層で 4 回。左の番号が小さいほど・右の番号が大きいほど、「イエスがこれに類  
する発言をしたとする主張の可能性は高くなる」(75)

「複数証言の規準」という方法論を厳密化し洗練したもの。

cf. 「相違の規準」=ユダヤ教とも初期キリスト教とも異なるものだけが、イエス  
の真正の言葉として受容しうる。

○第二：最古層に見出される資料の解釈。

イエスと紀元 1 世紀のユダヤ人地域パレスティナ環境についてわれわれが知りうるこ  
とを、総合的、通文化的文脈に置く。文化人類学、社会人類学、医療人類学、植民  
地抵抗運動の社会学、前工業時代農村社会や名誉と恥の社会、親分子分の社会等々  
の力学的原理と構造から得られたモデルや洞察。

#### (4) イエスの宗教運動の政治性

8. 「神の国」というキーワードをいかに解釈するか

キリスト教神学と同様に、聖書学においても、「イエス」は常に研究者の中心的な関  
心を占めてきた。→歴史的イエスの探求、「神の国」「終末論」の問題。

9. 「イエス研究／終末論」の変遷

1) 19 世紀：近代聖書学の確立期、イエス伝研究、市民社会の倫理の教師イエス

2) 19 世紀末～ 20 世紀初頭：黙示的終末論の再発見

→古代の黙示的終末論の宗教家イエス

3) 20 世紀聖書学のパラダイムの浸透：弁証法神学、モルトマンやパネンベルク

4) 1980 年代以降：20 世紀の聖書学のパラダイムの崩壊と新しいイエス探究、黙示的終  
末思想に基づく宗教者イエスという理解の相対化、知恵の教師イエス。

10. クロッサン

「神の王国」とは、皇帝(カエサル)ではなく神が玉座に就いた世界、皇帝(カエサル)  
ではなく神が公明正大に支配する世界、という意味です。宗教概念であると同時に政治概

念なのです。そして倫理概念であると同時に経済概念なのです。」(62)

「神の黙示的な介入と神の社会革命は全く違います。そしてイエスは、洗礼者ヨハネの期待した黙示的な介入を捨てて、社会革命の宣言に転向したのです。」(63)

「イエス時代の地中海世界では王が実際に権力を持っていました。一世紀、王権について関心を抱いたのはユダヤ人の黙示預言者だけではありません。王権はヘレニズム世界共通の話題です。これは、いかに権力を正しく人道的に行使するかという議論でした。福音書は、人間の権力の使い方と神の権力の使い方の差を際立たせようと苦心しています。」

「結局のところ、反社会的な挑発と痛烈な政治批判が伝わりさえすれば、「王国」の代わりに「共同体」を使ってもいいのです。」(64)

「神の王国の分け隔てない平等な性格の象徴として、イエスは開かれた食卓の伝統を残しました。その後、特定のキリスト教徒集団が最後の晩餐を儀礼に仕立てて、あの解釈の伝統にイエスの死の記念を付け加えたのです。」(78)

「現代の民主主義よりもずっと過激な体験」(79)

「イエスの語る開かれた食卓や、暴力の終わりや、根本的な平等や、神の王国の雛形は、ただ民主主義を先取りしているだけではありません。現代人の想像するよりも過激で、恐ろしいものです」、「イエスの言動を飼い慣らして無謀なものにはいけないのです。イエスの見立てた神の王国は、そのまま現実の状況に翻訳できるものではないでしょう。その意義はむしろ、あらゆる社会状況や慣習との緊張関係を保ちつつ、暴力を排除して正義を実現するための努力を促すことにあるのでしょうか。神の王国は、この地上にこそ根本的な正義を実現しろと呼びかける神を宣言しているわけです。」(80)

「あの「大飯食らいの大酒飲み、取税人と罪人の友達」という悪口のもとになったのは、社会の因習を壊す食事会に人を招く実践的活動でした。イエスは開かれた食卓を社会の雛形にしたかったのです」、「癒し」「あれは同情に基づくただの個人的な行為ではなくて、既成の社会構造とは別な神の王国の雛形を作る手段です。」(81)

### (5) パウロ・ルネッサンス

11. アメリカの聖書学会 (SBL) の「聖書と帝国」分科会 (*The Bible and Empire Unit*)

パウロ・ルネッサンス、イエスからパウロへ

12. Richard A. Horsley (ed.), *Paul and the Roman Imperial Order*, Trinity Press International, 2004.

Introduction (Richard A. Horsley)

Protestant interpreters have traditionally understood Paul in opposition to Judaism. Luther's discovery of "justification by faith" in Paul's Letter to the Romans, the solution to his frustrating quest for a sense of righteousness, became the formative religious experience through which Paul's letters have been read. Paul became the paradigmatic *home religiosus* whose quest for salvation by a compulsive keeping of the Law in his native Judaism drove him to his dramatic conversion to God's grace manifested in Christ.

This approach to Paul that has dominated NT studies for generations is based on the unquestioned and distinctively modern Western assumptions that Paul is concerned with religion and that religion is not only separate from political-economic life, but also primarily a matter of individual faith. (1)

in the aftermath of the Holocaust

the great hero of faith who articulated foundational Christian Theology was discovered to share the same fundamental "covenantal nomism" of Judaism,

Paul's new religion of personal faith was no longer seen as sharply opposed to Judaism. (2)

13. 西洋的キリスト教会の神学的基盤としてのパウロ

パウロへの反発・パウロ批判、体制的イデオロギーの代表

14. 新しいパウロ解釈：1980年代以降

体制派パウロから戦うパウロへ

政治哲学におけるパウロへの注目

「そこではもはや、ユダヤ人もギリシア人もなく、奴隷も自由な身分の者もなく、男も女もありません。あなたがたは皆、キリスト・イエスにおいて一つだからです。」(ガラテヤ 3:28)

「パウロの神学の社会革命をひき起こす潜在力を秘めていた」「ユダヤ人と異邦人の一体化」(サンダース、24)

「レーニン主義者パウロ」「アウトカーストの共同体」「無制約的な普遍主義への関係にもとづいて形成された戦う共同体」(ジジエク『操り人形と小人』青土社、195)

15. 現代思想におけるパウロ → バディウ、アガンベン、ジジエク

古代の歴史的思想的文脈におけるパウロ

ユダヤ思想の文脈におけるパウロ

聖書学的議論(従来の閉鎖的な議論に対して)への新たな問題提起

## (6) パウロと政治哲学

・「政治神学への向けたパウロ」あるいは「パウロから政治神学へ」

12. Rollin A. Ramsaran, *Resisting Imperial Domination and Influence. Paul's Apocalyptic Rhetoric in 1 Corinthians.*

Studies of Greco-Roman rhetoric have done much to illuminate how Paul draws on the standard rhetorical forms in formulating the arguments in his letters. Yet how Judean apocalyptic traditions inform or possibly provide the backbone to Paul's arguments have not been adequately examined. Paul moves between two rhetorical registers, that of the Jewish apocalypticist and that of the Greco-Roman rhetor. Indeed, this investigation 1 Corinthians may suggest that Paul "mixes" registers, as presumably has already happened in his personal history as a Diaspora Jew and, more recently, as one called by Christ as an apostle to the Gentiles. (89)

The story of the crucified Christ reveals the divine condemnation and imminent destruction of the imperial rulers, power relations, aristocratic codes, and unrighteous influences embedded in the ruling structures; it provides renewal and power for the faithful people of God; and it sets a pattern for the vindication and transformation of the faithful, including martyrs. Paul clearly combines two registers, that of the Jewish apocalypticist and that of Greco-Roman rhetoric. Attention to both registers is necessary for gaining a clearer picture of Paul's persuasive techniques. Paul's apocalyptic rhetoric in 1 Corinth by casting his deliberative argument into the larger framework of God's intervention through judgment and renewal. (100)

This chapter(1 Cor 15) is the "climax" of the letter because it is the climax of the "story," pointing both to the "final triumph [and renewal] brought by God" and to a courageous moral stance in the face of death-dealing powers (15:30-31), which brings assurance of participating in God's final triumph over, and renewal of, the present order. (101)



## 13. 難問としてのローマ書13章

13:1 人は皆、上に立つ権威に従うべきです。神に由来しない権威はなく、今ある権威はすべて神によって立てられたものだからです。2 従って、権威に逆らう者は、神の定めに従うことになり、背く者は自分の身に裁きを招くでしょう。3 実際、支配者は、善を行う者にはそうではないが、悪を行う者には恐ろしい存在です。あなたは権威者を恐れないことを願っている。それなら、善を行いなさい。そうすれば、権威者からほめられるでしょう。4 権威者は、あなたに善を行わせるために、神に仕える者なのです。しかし、もし悪を行えば、恐れなければなりません。権威者はいたずらに剣を帯びているのではなく、神に仕える者として、悪を行う者に怒りをもって報いるのです。5 だから、怒りを逃れるためだけでなく、良心のためにも、これに従うべきです。6 あなたがたが貢を納めているのもそのためです。権威者は神に仕える者であり、そのことに励んでいるのです。7 すべての人々に対して自分の義務を果たしなさい。貢を納めるべき人には貢を納め、税を納めるべき人には税を納め、恐るべき人は恐れ、敬うべき人は敬いなさい。

## 14. 権威に対する服従とは何か。時間という視点から。

・終末の切迫という時間性における勧め（→ 一般化できる命題か？）

「この世」の秩序は絶対的な意味をもつわけではない。

「25 未婚の人たちについて、わたしは主の指示を受けてはいませんが、主の憐れみにより信任を得ている者として、意見を述べます。26 今危機が迫っている状態にあるので、こうするのがよいとわたしは考えます。つまり、人は現状にとどまっているのがよいのです。27 妻と結ばれているなら、そのつながりを解こうとせず、妻と結ばれていないなら妻を求めてはいけません。28 しかし、あなたが、結婚しても、罪を犯すわけではなく、未婚の女が結婚しても、罪を犯したわけではありません。ただ、結婚する人たちはその身に苦勞を負うことになるでしょう。わたしは、あなたがたにそのような苦勞をさせたくないのです。29 兄弟たち、わたしはこう言いたい。定められた時は迫っています。今からは、妻のある人はない人のように、30 泣く人は泣かない人のように、喜ぶ人は喜ばない人のように、物を買う人は持たない人のように、31 世の事にかかわっている人は、かかわりのない人のようにすべきです。この世の有様は過ぎ去るからです。」（1コリント7）

パウロのいわば個人的な見解（意見）、あるいはローマ市民でもあるパウロの現実主義。

・古代の王制は過ぎ去った。現代においては、「主の指示を受けて」いない問題については、自らの「意見」をもつ必要がある。古代の王への服従と、現代の政府への服従は同じなのか。パウロは、現代の民主主義的選挙によって選ばれた「指導者」について、「すべて神によって立てられたもの」と語るだろうか。

## &lt;参考文献&gt;

1. 青野太潮『最初期キリスト教思想の軌跡——イエス・パウロ・その後』新教出版社。
2. 土屋博『教典となった宗教』北海道大学図書刊行会：「牧会書簡」の共同体
3. G・タイセン『原始キリスト教の社会学』ヨルダン社。

Gerd Theissen, *The Social Setting of Pauline Christianity. Essays on Corinth*, Wipf & Srock, 1982 (1975).

4. 大貫隆『福音書研究と文学社会学』岩波書店：ヨハネ共同体

5. H・C・キー『初期キリスト教の社会学』ヨルダン社。
6. Richard A. Horsley, *Sociology and the Jesus Movement*, Continuum, 1994 (1989)
7. David G. Horrell, *An Introduction to the Study of Paul*. Second Edition, T & T Clark, 2006.
8. 佐竹明『使徒パウロ—伝道にかけた生涯 (新版)』NHKブックス。
9. E. P. サンダース『パウロ』教文館。
10. 荒井献編『パウロをどうとらえるか』新教出版社、1972年。
11. 宮田光雄『国家と宗教——ローマ書十三章解釈史=影響史の研究』岩波書店、2010年。
12. Dieter Georgi, *The Opponents of Paul in Second Corinthians. A Study of Religious Propaganda in Late Antiquity*, T & T Clark, 1987.  
     , *Theocracy in Paul's Praxis and Theology*, Fortress Press, 2009.
13. Jacob Taubes, *Die politische Theologie des Paulus*, Wilhelm Fink Verlag, 1993. (ヤーコプ・タウベス『パウロの政治神学』高橋哲哉・清水一浩訳、岩波書店、2010年。)
14. Riachrd A. Horsley, *Paul and Empire. Religion and Power in Roman Imperial Society*, Trinity Press International, 1997.
15. David G. Horrell, *An Introduction to the Study of Paul* (Second Edition), T & T Clark, 2006.
16. Steven J. Friesen, Daniel N. Schowalter, and James C. Walters (eds.)  
     *Corinth in Context. Comparative Studies on Religion and Society*, Brill, 2010.
17. John Milbank, Slavoj Žižek, Creston Davis with Catherine Pickstock, *Paul's New Moment. Continental Philosophy and the Future of Christian Theology*, Brazos Press, 2010.
18. Theodore W. Jennings, Jr., *Outlaw Justice. The Messianic Politics of Paul*, Stanford University Press, 2013.